首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」見学会＆子育て情報交換会
～来て、見て、話そう、子育てのこと～

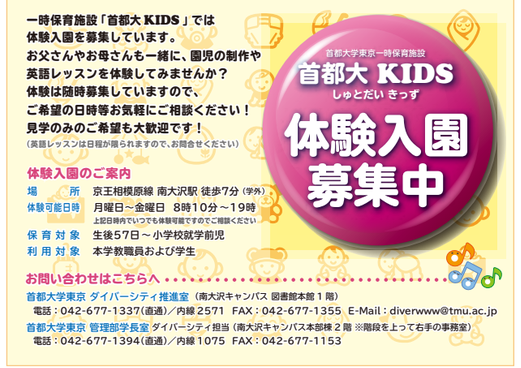
首都大学東京の一時保育施設「首都大KIDS」の認知向上と利用者の増加を目指すとともに、出産、育児に取り組んでいる、またこれから取り組む予定の本学構成員同士の交流を促進することを目的として、一時保育施設の見学会と子育て情報交換会を開催しました。

参加者が保育施設に到着した時は、ちょうど英会話レッスンが始まるところで、約25分のプログラムを見学することができました。その後、先生方の案内で子どもたちの散歩コースとして、2か所の公園を見学しました。施設に戻ってからは情報交換会を行い、施設の一日のようすや施設の特徴などについて質疑応答が行われました。お話しの中から、先生方が少人数の施設でもできる限り子どもにさまざまな体験をしてもらいたいという思いを強く持ち、制作や遊びに工夫を凝らしていることが伝わってきました。参加者からは、具体的な保育のようすや利用時の持ち物、利用時間などについて具体的な質問がたくさん寄せられ、活発な質疑応答となりました。

参加者からは「実際の保育現場に触れることができ、大変よかったです」「お散歩コースの見学や英会話レッスンの見学ができ、いろいろと知ることができました」などの感想をいただき、「選択肢の一つとして活用させていただきたいと思います」との声も寄せられました。（藤山）

＊「首都大KIDS」のご利用にあたっては、事前登録が必要となります。
詳細はダイバーシティ推進室のWebサイト / 首都大KIDSのページ
http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html
をご確認いただくか、ダイバーシティ推進室までお問い合わせください。

「首都大KIDS」体験入園募集中



首都大学東京の一時保育施設「首都大KIDS」では、体験入園を随時行っています。実際の保育のようすを体験してみませんか？
お問い合わせ、お申し込みはダイバーシティ推進室、または学長室までお願いします。

コラム　ダイバーシティ推進室 特任研究員 横山家の育児

慌ただしい日々ですが、子どもたちもすくすく成長しています。1月生まれの双子は生後半年になりました。寝返りができるようになり、ハイハイも始まっています。この月齢になると周りのものを口で確認するようで、気になる物はまずは口に持っていきます。先日はお掃除ロボットに驚き、泣いていたのですが、その後充電中のお掃除ロボットをペロペロしていました。口は食物を食べることも含めて、外の世界の入り口なのだなあ、と感じます。

一方、長女は3歳になりました。おしゃべりも上手になり、思ったことは何でも話します。彼女がいると賑やかで華やいだ雰囲気になります。そして、ついにトイレができるようになりました。初めて食べた時も嬉しかったですが、それ以上に感慨深く、妻とともに子どもの成長を喜びました。本人も誇らしげな表情で「出来たんだよ」と話していました。

「食べること」、「出すこと」は自立への大きな一歩ですね。僕らの役割は安心して「食べ」、「出せる」環境をつくることなのでしょう。色んな人と出会い、良いものを吸収して、成長して欲しいものです。（横山）

編集後記

厳しい暑さが続いていますが、キャンパス内は緑が茂り、花々はとても美しく咲いています。また、7月のバリアフリー講習会で来学された永井氏より、施設内の点字ブロックが整備されている事への驚きとお褒めの言葉をいただきました。障がいのあるなしに関わらず、誰もが心地よく過ごせる環境である事は嬉しいですね。（兼子）

首都大学東京　ダイバーシティ推進室
〒192-0397東京都八王子市南大沢1-1　図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線2571　FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2019年8月31日
編集・発行

No.24 August 2019

Newsletter
ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY 首都大学東京

2019年度　第1回 バリアフリー講習会

Contents

1
第1回バリアフリー講習会「パラスポーツとダイバーシティ ～視覚障害者柔道選手を招いて～」

2
手話講習会（初級）
聴覚障がい学生支援
寄稿「日野での支援活動」

3
ランチタイムレクチャー「ダイバーシティって、なんだろう？」
ダイバーシティ事業紹介「あなたの個性が活きる未来へ」
コラム「ダイバーシティとスポーツ」

4
首都大学東京一時保育施設「首都大KIDS」見学会＆子育て情報交換会
コラム「横山家の育児」

パラスポーツとダイバーシティ～視覚障害者柔道選手を招いて～

1. はじめに

2019年7月11日（木）牧野標本館別館TMUギャラリーにて、2019年度第1回バリアフリー講習会「パラスポーツとダイバーシティ～視覚障害者柔道選手を招いて～」を開催しました。講師に東京パラリンピックの視覚障害者柔道日本代表候補で学習院大学職員の永井崇匡氏をお招きしました。

2. プロフィール

永井氏は1995年群馬県出身で、幼少期の病気が原因で全盲になり地元の盲学校に入学します。小学校1年生の時に地元の道場に通い始めましたが、その道場では視覚障がいの人を受け入れることが初めてだったため、試行錯誤しながらの指導だったようです。永井氏は競技に打ち込み、晴眼の小学生が参加する県大会で度々上位入賞するようになります。柔道を始めたことで盲学校の外の世界を知ることになったといいます。

その後、筑波大学付属視覚特別支援学校に進学します。この学校の特徴は、全国から集まる同級生と寮生活を送ることと、自立歩行訓練をはじめとした自立活動が充実していたことだといいます。必然的に街に出る機会が多くなり、学外の柔道教室に通い、門限の時間まで柔道に打ち込むことができたといいます。

一方で、浪人生活では初めて晴眼者の世界で学ぶことになり、指示語の多さに戸惑うことがあったそうです。進学した学習院大学では数学を専攻し、資料のテキスト化や教員の配慮等を受けながら学び、今年の3月に卒業しました。現在は競技活動と並行する形で学習院大学で働いています。

3. 視覚障害者柔道について

競技の特徴を、永井氏の試合の映像を用いて紹介していただきました。視覚障害者柔道は、相手と組んだところから試合が始まります。それ故に「一本」で決まることが多く、残り数秒で逆転することも多々あり、最後まで緊張感があることが大きな魅力だといいます。また、競技者の空間把握を助けるため、畳の端が近づくと審判が「場外、場外」と口頭で伝えます。それ以外の競技方法については一般の柔道と変わらず、多くの競技者は晴眼者と稽古をしているそうです。

なお、講習会では永井氏がアジア大会で獲得した銅メダルを持参してくださいましたが、メダル自体に音が鳴る工夫がされており、表面には点字が刻印されておりました。

4. まとめ 感想など

最後に永井氏は、幼いころより視覚障がい者、晴眼者どちらとも関係を作り、「一人でできること、配慮があればできること、できないこと」を自身が理解し、周囲に伝えられるようになることが大切である、とまとめられました。

これまでの人生経験を含めてお話を伺い、障がいのある人の活躍の背景には、学校や地域社会での様々な経験があることを理解しました。永井氏は7月の国際大会を順当に勝ち進むことができれば、東京パラリンピックの代表に決まるそうです。ご活躍を祈念しております。

以下、受講者の感想です。「パラアスリートの方のお話を初めて聞きました。普段私たちが気づかないが困ることがあるということが分かりました。それと同時に柔道のように激しいスポーツを楽しんでいることを知ることができました」（学生）

「障がいのある方の幼少期からの育ち方、考え方の変化を聞けたのは初めてでとても勉強になりました。東京での活躍を心から祈っています!! ありがとうございました」（職員）（横山）

手話講習会（初級）

手話講習会は今年度で17年目となります。通年での開催で、前期の初級講習会は定員一杯の30名が受講し、指文字、挨拶、数字、家族などの基本的な手話表現を学習しました。講習の後半には会話練習を取り入れ、会話を通して手話を習得することを目指しました。

今年度の受講生の特徴として、多数の留学生が参加したことが挙げられます。内容の理解は容易でなかったかもしれませんが基本的な手話表現をマスターし、最終回では受講生を代表して講師へのお礼の手話スピーチを行いました。他にも、手話講習会の受講から手話サークルに参加する学生や、障がい学生支援を担う支援スタッフに登録する学生などがおり、様々な広がりがみられました。後期は南大沢キャンパスで中級講習会を開催します。また、聴覚障がい学生が日野キャンパスに移動したこともあり、日野キャンパスでの手話講習会開催も検討しております。

手話講習会は毎年八王子市聴覚障害者協会の方々にご協力いただき開催しております。ダイバーシティ推進室が主催する手話講習会ということもあり、例えば「結婚」の手話表現は、「男性と女性が一緒になる」と表すのですが、多様な性の在り方の視点から手話表現についても様々な議論が始まっている、と今日的な課題についても紹介していただきました。容易に結論が出るものではありませんが、様々な視点から考察を深めていきたいと思います。皆さまのご協力に感謝申し上げます。

以下、受講生の感想です。「いろいろな手話を学び、手話ニュースの内容が少しだけ分かるようになって嬉しかったです。聴こえない人との交流会も手話でコミュニケーションをとれて楽しかったです。もっと実践的に使えるように練習します」。「『いつか学んでみたい』と思っていた手話ですが、偶然インフォメーションギャラリーで看板を見つけ参加できました。ありがとうございました」（横山）

聴覚障がい学生支援

2017年度から取り組んでいる聴覚障がい学生支援は3年目を迎えました。今年度の新たな取り組みを中心に、支援活動の様子を紹介します。

支援スタッフコーディネーター

これまではダイバーシティ推進室の教職員が支援スタッフの派遣を行っていましたが、今年度からは先輩支援スタッフが支援スタッフコーディネーターとして、週3日ダイバーシティ推進室に常駐し、その役を担っています。具体的には、パソコンノートテイク講習会・ノートテイク講習会などの支援者養成講座の運営、日々の授業支援の調整、広報誌の作成などを行っていますが、その細やかで丁寧な仕事ぶりは、皆の支えとなっています。

キャンパス間の連携

一方で聴覚障がい学生の所属が日野キャンパスに移動し、新しい環境での支援活動が始まりました。日野キャンパスの教職員・学生の協力により、支援活動を展開していますが、南大沢キャンパスに比べ学生数が少ない中で支援体制を構築することは容易ではありません。

状況に応じて南大沢キャンパスの支援スタッフが赴いて支援したり、両キャンパスをインターネットで繋いで遠隔支援を行ったり、地域の手話通訳者に支援を依頼するなど、様々な工夫をしながら取り組みを進めています。

学生とともにつくる支援活動

学年の進級とともに学生生活は大きく変わり、支援活動もその都度新たな取り組みが求められます。学生とともにつくる支援活動という基本的な姿勢を大切に、柔軟な対応ができる支援体制の構築に取り組んでいきます。

11月17日（日）には第5回のTokyoみみカレッジが南大沢キャンパスで開催されます。ダイバーシティ推進室では、高校と大学の連携による聴覚障がい学生支援をテーマに講演会を行います。私たちの活動の一端を知っていただければ嬉しいです。ぜひ足をお運びください。（横山）

「日野での支援活動」

日野キャンパス、航空宇宙システム工学コース所属の支援スタッフです。平日は研究室にいき、ゼミに参加したり数値流体力学の勉強をしたりしています。私はこの四月から支援スタッフとして活動させて頂いています。

支援スタッフに登録するきっかけは、学科長から学生に送られた募集のメールです。今まで障がいのある方々と接する機会はあまりなく、ダイバーシティについて考えられるのではないかと思ったことなどが理由で応募しました。私は日野キャンパスで聴覚障がいのある学生の授業でパソコンノートテイクの支援を行っています。最初の頃はタイピングも遅く、周りの方に迷惑をかけていたと思います。ですが、どのスタッフの方も優しくフォローして下ったので、とても支援しやすかったです。

私は人と話すのが好きなので、授業後などに聴覚障がいのある学生と思うように会話ができないのは寂しく思います。そのため、この半期でその方に少し手話を教えてもらいました。「暑い」という手話は、うちわをあおいでいるような仕草だったりして、普段の生活と結びつきやすい由来を持つ手話もあり面白いなと思いました。

この夏休みに少し手話を勉強して、もっと多くの人とコミュニケーションをとれるようになりたいと思っています。

障がい者支援スタッフ
システムデザイン学部
航空宇宙システム工学コース
4年 坂田 歩美

日野キャンパスの風景

ランチタイムレクチャー「ダイバーシティって、なんだろう？」

ダイバーシティ推進室の取り組みや、障がい、文化的多様性、セクシュアル・マイノリティ、男女共同参画など、ダイバーシティにかかわる社会的な課題に対する理解を深めることを目的として開催しているランチタイムレクチャー。2019年度前期は、内容ごとに全体を3つのブロックに分け、それぞれに特徴を持たせて開催しました。

第1回～4回は「ダイバーシティのキホン」として、ダイバーシティ推進室の取り組みに沿ったテーマで講義形式のレクチャーを中心に実施しました。第5回～7回は、大学内のさまざまな部署の方々と協力しながらダイバーシティの推進に取り組んでいるようすを知ってもらおうという意図のもと、「ダイバーシティをつくる、多様なかかわり」として、障がい者支援スタッフの活動紹介をはじめ、国際センターの嶋内佐絵准教授、学生相談室の駒屋雄高准教授にご協力いただき、それぞれの専門的な視点から話題を提供していただきました。第8回～10回は、ランチタイムレクチャーの特徴でもある、講師と参加者との双方向性や参加者同士の交流をより深めようと、「みんなで考えるダイバーシティ」として、ワークショップやディスカッションなど、参加型のレクチャーを実施しました。

初めてダイバーシティ推進室の存在を知った学生や、今年度から開設されたTMUプレミアム・カレッジ受講生の参加もあり、少しずつダイバーシティの輪が広がっていることを感じることができました。

参加者からは、「毎年参加していますが、毎年内容が少しずつ変わっていて楽しい。特に今年はワークショップが面白かったです」「予想通り、楽しくかつ有意義でした。後期も何かやってください。希望します」などの感想や、継続的な開催の要望をいただきました。後期も引き続き、ダイバーシティ推進室の認知向上をめざし、他部署とのさらなる連携を図りながら、開催していきたいと考えています。（藤山）

＊各回テーマ

第1回　ダイバーシティ推進室の取り組み紹介
第2回　男女共同参画について
第3回　セクシュアル・マイノリティのいま
第4回　障がいのある学生への合理的配慮について考える
第5回　障がい者支援スタッフの活動紹介
第6回　キャンパスの国際化と多様性から生まれる問題
第7回　学生相談室の取り組み紹介
第8回　男らしさ・女らしさワークショップ
第9回　障がいのある学生支援事例を考える
第10回　カミングアウトとアウティング

ダイバーシティ推進事業紹介「あなたの個性が活きる未来へ」

7月14日（日）、8月17日（土）の2日間、首都大学東京の大学説明会が開催されました。ダイバーシティ推進室では、ダイバーシティ推進室の認知度向上と活動への理解促進を目指し、さまざまな取り組みの中から受験生や保護者の関心に合わせ、「障がいのある学生支援」「理系女子のキャリアパス」「セクシュアル・マイノリティの理解」の3点の取り組みを紹介しました。

「障がいのある学生支援」ゾーンでは、視覚障がい、聴覚障がいそれぞれの学生への支援内容や支援スタッフの概要をまとめたポスター展示のほか、聴覚障がい学生が使用しているUD Talkの体験やパソコンノートテイクの実演、ビデオ会議システムZoomを用いた遠隔支援のデモンストレーションなどを行いました。このゾーンでは支援スタッフの学生が中心となって来場者の対応にあたり、自らが日ごろの支援活動で体験したことや考えたことなどを交えて解説しました。

「理系女子のキャリアパス」ゾーンでは、いわゆる「リケジョ」に関する取り組みが必要な理由をデータに基づいて解説するポスターとともに、理工系を目指す女子中高生や保護者の一助になるよう、本学の理工系学部・研究科の女子学生の就職状況を示したポスターを展示しました。

「セクシュアル・マイノリティの理解」ゾーンでは、セクシュアル・マイノリティの基礎知識を解説したポスターと、本学におけるセクシュアル・マイノリティの理解・啓発、および当事者支援に関する取り組み内容をまとめたポスターを展示しました。

また、お昼ごろには聴覚障がい学生と支援スタッフによるミニトークも行われ、日ごろの支援のようすやダイバーシティ推進室での過ごし方など、高校生や保護者にとって、首都大の学生が身近に感じられるような話を繰り広げました。

参加者からは「学生さんが明るくてとても良い雰囲気でした」「多様性を認め合う素敵な大学だということがとてもよくわかりました」などの前向きな感想をいただくことができました。（藤山）

コラム

ダイバーシティとスポーツ ～パラアスリートは「超人」か？～

2012年のパラリンピック・ロンドン大会に際して、中継を担当したイギリスの放送局「チャンネル4」が作成したCM「Meet the Superhumans」をご存知でしょうか（＊1）。このCMでは、パラアスリートを「Superhuman＝超人」と定義し、その卓越した能力を描くことに重点が置かれていました。パラアスリートの身体能力の高さ、競技に取り組む姿の格好よさを前面に押し出したこのCMは世界中で注目を集め、パラリンピックの認知度を高めるうえでも大きな効果があったようです。このCMは、これまでのような「障がいにも負けずに頑張っている障がい者」像を一新し、アスリートとしての魅力を伝える視点を築いたという点で、意義のあるものだと言えるでしょう。

しかしその一方で、あまりにもその身体能力の高さ、パラアスリートの「すごさ」が強調されることで、パラリンピックを目指すわけではない「普通の」障がい者との分断を生んでしまう可能性があることにも留意しなければなりません。私たちの多くが、オリンピックに出場するアスリートのような身体能力を持っているわけではないのと同様に、多くの障がい者もまた、パラリンピックに出場するアスリートのような「超人」的能力を持っているわけではありません。また、パラアスリートであっても、毎日の生活の中で困ることもあるでしょう。障がい者を取り巻く現状を考えれば、多くの人がパラリンピックをきっかけとして、「超人」ではない「普通の」障がい者が直面している困難に目を向け、誰にとっても暮らしやすい社会を作ることに関心を持つようになることを期待したいと思います。（藤山）

＊1 … https://www.youtube.com/watch?v=tuAPPeRg3Nw